

同時に母文化者である日本人側も非（日本語）母語話者（学習者）と日本語でコミュニケーションをしているときは、「国際日本語」でコミュニケーションしているという意識をもつことが大事である。「国際日本語」とは、大阪大学で英語の授業を行っている日野信行氏が使った「国際コミュニケーションの手段として使われるときの英語」＝「国際英語」と同様に、日本人とベルギー人、あるいは、ベルギー人とオランダ人が日本語で意思疎通を行ったならば、その場面では、日本語は「国際日本語」として機能しているわけである。

また、自己表現と意思疎通の媒体として「国際×語」の「×語」には、状況によってどんな言語でも入りうる。そういった意識があれば、例えばベルギーフランス語圏の人に、「あなた、今、ビール、飲みたいですか？」とパーティー会場で聞かれても、私のことを思いやってくれたんだなと思って、なんの違和感もなく「ありがとう。おねがいします。」あるいは、「ありがとう。飲みたいです。」と答えることができるかもしれない。

### <参考文献>

- 宇佐美まゆみ（2003）「異文化接触とポライトネス -ディスコース・ポライトネス理論の観点から-」, 『国語学』第54巻3号, pp.177-132.
- 宇佐美まゆみ（2008）「相互作用と学習 -ディスコース・ポライトネス理論の観点から-」西原玲子・西郡仁朗編, 『講座社会言語科学』第4巻教育・学習, pp.150-181, ひつじ書房.
- 高木三知子（2003）「文型練習からの日本紹介」第8回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集, pp.195-199.
- 日野信行（2013）「「国際英語」におけるメディアリテラシー教育の実践」佐藤慎司・熊谷由理編『異文化コミュニケーション能力を問う-超文化コミュニケーション力をめざして』 pp.207-227.
- 牧野成一（2003）「文化能力基準作成は可能か」『日本語教育』118号, pp.1-16.
- 牧野成一（2009）「文化習得論の構築をめざして」『第二言語としての日本語の習得研究』第二言語習得研究会[第12号]寄稿論文, pp.5-27.
- 牧野成一（2011）「日本語口頭能力基準とそれに基準するテスト法—米国 OPI と欧州連合の OJAE の場合」『日語学习与研究』115, pp.50-63.
- 吉島茂/大橋理枝(他)訳・編(2002)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 pp.135.

### 発表3 なぜポライトなつもりがインポライトになるのか

—ディスコース・ポライトネス理論の観点から日本語教育に示唆できること—

宇佐美まゆみ  
国立国語研究所

### 要旨

本稿では、ポライトネスを敬語のような言語形式だけの問題としてではなく、あいづちやスピーチレベルのシフトなどの現象など、談話レベルの現象も含めて実際の「ポライトネス効果」を捉える必要があるとして、その基本原則を体系化した「ディスコース・ポラ

イトネス理論」(宇佐美 2001;2003;2008;2009,2011)の基本的概念を簡単に導入する。DP理論では、話し手と聞き手の「ある言語行動の適切性についての捉え方や期待値」(「基本状態(デフォルト)」)が許容ずれ幅を超えて異なることが、実際の「インポライトネス効果」をもたらすと説明する。ここでは、主に、フランス語圏における学習者が様々な状況で遭遇する異文化間ミス・コミュニケーション場面の事例を取り上げ、それらがこの理論でいかに解釈できるかを提示し、この理論の解釈の可能性と妥当性を検証する。また、このような分析や解釈が、ミス・コミュニケーションの事前防止にいかに応用できるか、また、それらの考察をいかに日本語教育に生かしていくことができるかについても考察する。

**【キーワード】** ディスコース・ポライトネス理論、ポライトネスとインポライトネス、異文化間コミュニケーション、談話の基本状態(ディスコース・デフォルト)、ポライトネス効果

**Keywords:** Discourse Politeness Theory, politeness vs. impoliteness, intercultural communication, discourse default, politeness effect.

## 1 はじめに

本稿では、まず、話し手と聞き手の「ある言語行動の適切性についての捉え方や期待値」(「基本状態(デフォルト)」)が許容ずれ幅を超えて異なることが、実際の「インポライトネス効果」をもたらすと説明する「ディスコース・ポライトネス理論」の基本概念を簡単に導入する。その上で、主に、本パネルで取り上げられたフランス語圏における学習者が様々な場面で遭遇する異文化間ミス・コミュニケーション場面の事例(東 2017 予定、高木 2017 予定)を取り上げ、それらがこの理論でいかに解釈できるかを提示する。

## 2 「ディスコース・ポライトネス理論」の概要

「ディスコース・ポライトネス理論」(以降、DP理論)は、宇佐美(2001)でその概要が示され、宇佐美(2003)で異文化間コミュニケーションの捉え方との関係が論じられた。また、その後は、「相互作用と学習」という観点を中心にしたもの(宇佐美 2008)、「プロフィールシエンシーと評価」に関連付けたもの(宇佐美 2009)などが提出されている。

DP理論には、以下の7つの鍵概念がある。①「ディスコース・ポライトネス」、②「基本状態」、③「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、④「有標行動」と「無標行動」、⑤見積り差(De値)、⑥ポライトネス効果、⑦「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」である。以下、それぞれについて簡単に解説する。

### 2.1 「ディスコース・ポライトネス」

『ディスコース・ポライトネス』とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である(宇佐美 2001)と定義される。また、特定の「活動の型」の「典型的な状態にある談話の総体」も指す。

### 2.2 「基本状態」

「基本状態」には、以下の2種類がある。1つは、「特定の『活動の型』における談話の

『典型的な状態』を指し、「談話の基本状態 (discourse default)」と呼ぶ。また、もう1つは、「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』」を指し、「談話要素の基本状態」と呼ぶ。

### 2.3 「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論において、ポライトネスは、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為 (Face Threatening Act: FTA)」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を少しでも軽減するためにとる戦略」<sup>1</sup>として捉えられている。このような「フェイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを、DP 理論では、「有標ポライトネス」と呼ぶ。

しかし、このように「相手のフェイス侵害度を軽減するためにとる戦略」<sup>1</sup>としてのみポライトネスを捉えると、フェイス侵害行為が生じていない状態にある「日常会話 (ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく説明できない。事実、我々の日常生活には、「フェイス侵害度軽減行為」とは異なるタイプのポライトネスもある。すなわち、特定の状況において、「あつて当たり前で、それが現れないときに初めてそれが無いことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。つまり、特別に丁寧というわけではないが、「特定の状況や場面において期待されている言語行動」が守られているため不快ではないというタイプの「不快がない状態」を、「無標ポライトネス」と呼ぶ。先に説明した談話の「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス」と捉えることができる。

### 2.4 「有標行動」と「無標行動」

談話の「基本状態」は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。そして、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動を「無標行動」、各々の要素が基本状態から離脱する言語行動、或いは、基本状態とは異なる談話レベルの一連の行動を、「有標行動」と呼ぶ。

DP 理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものであると捉える。つまり、各々の談話と、それを構成する諸要素の「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性 (基本状態からの離脱度)」に着目して、「相対的ポライトネス」の効果を考えるのである。

### 2.5 見積り差 (De 値)

談話の「基本状態」を構成する諸要素は、「無標行動」、つまり、あつて当たり前のものであり、ディスコース・ポライトネスを形作っている。この「基本状態」は、各々の要素の状態としても、複数の要素の分布の状態 (異なるスピーチレベルの構成比率等) としても、そして諸要素から構成される談話の総体 (ディスコース・ポライトネス) としても、ポライトネスの観点からは、「最適の状態」、或いは、「最も自然な状態」として、「無標ポライトネス」になっていると捉える。それ故に、もし、談話の基本状態を構成する要素の何か<sup>2</sup>が欠けた場合や、或いは、何かが多すぎる場合は、それが意識され、ポライトでない<sup>3</sup>と認知されたり、その他の何か特別の「効果」が生まれると想定するのである。この話し手と聞き手の認識の違いが、「見積り差 (Discrepancy in estimations: De 値)」であり、この「効果」が、「ポライトネス効果」である。(「ポライトネス効果」については、次の 2.6 で説明

する。)

「見積り差」には、以下の3つのタイプがある。①「談話の基本状態」が何であるかについての話し手と聞き手の見積り差、②「ある有標行動のフェイス侵害度」についての話し手と聞き手の見積り差、③「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての話し手と聞き手の見積り差、である。

言い換えると、DP理論における上記3つのタイプの「見積り差」とは、話し手（行為者）と聞き手（認識者）の①「いわゆる「常識」についての捉え方の違い」、②「ある行為が当該の状況や場面においてどのくらい相手にかかる負担が大きいかについての捉え方の違い」（これによって、選択する行動が異なるので（←「ので」はない方がいい））、③「遂行された行為の「適切性」についての捉え方の違い」（選択結果の適切性）に対応する。DP理論では、これらの「見積り差」が、聞き手にとって「許容ずれ幅（ $\alpha$ ）」内であるか否かによって、ポライトネスに問題ないと捉えられるか、インポライトネスと認識されるかが決まると考える。

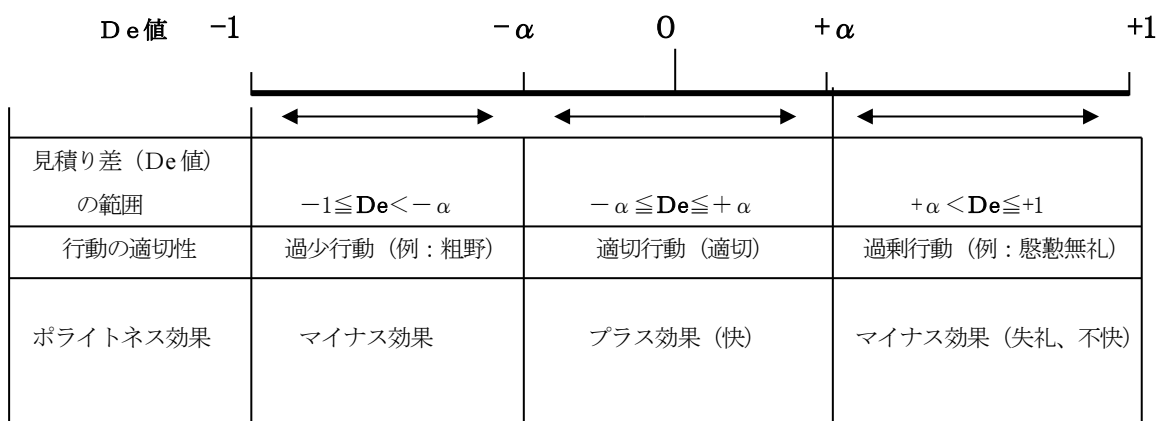
## 2.6 ポライトネス効果

DP理論では、「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の『見積り差 (De 値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知」を表すものであるとする。話し手と聞き手の「見積り差」にどのようなものがあるかについては、先の2.5にまとめた。つまり、①「談話の基本状態」が何であるかについての話し手と聞き手の見積り差、②「ある有標行動のフェイス侵害度」についての話し手と聞き手の見積り差、③「フェイス侵害度に応じて選択するポライトネス・ストラテジー」についての話し手と聞き手の見積り差、である。

いずれの場合も、ポライトネス効果には、以下の3種類がある。すなわち、①プラス効果、②ニュートラル効果、③マイナス効果である。これらは、言い換えると、①「心地よい、丁寧だと感じるという効果」、②「ニュートラルな効果（特に丁寧と感じるわけでもないが不愉快でもない効果：強調や話題転換などのような「言語的談話効果」等）、③「不愉快な、失礼だと感じる効果」である。

上述した3種類の話し手と聞き手による「見積り差 (De 値)」と「ポライトネス効果」との関係は、もちろん、絶対的な数値として算出できるわけではないが、以下の図1に示すように、0を挟む-1から+1までの1つの連続線上に分布すると仮定することによって、体系的に捉えることができる。

「見積り差 (De 値)」と「行動の適切性」、「ポライトネス効果」の関係は、以下の図1のようになる。



**見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値) :  $De = Se - He$**

Se : 話し手 (Speaker) の「見積り (estimation)」(以下の\*参照). 仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする.

He : 聞き手 (Hearer) の「見積り (estimation)」. 仮に, 0 から 1 の間の数値で表すものとする.

$\alpha$  : 許容できるずれ幅

**図1 「見積もり差 (De 値)」, 「行動の適切性」, 「ポライトネス効果」**

つまり、話し手と聞き手の「見積り差」が、0 か、「許容できるずれ幅 ( $\pm \alpha$ )」の範囲内に収まる行動は、「行動の適切性」の観点からは、「適切行動」とみなされ不快感をもたらさない。つまり、ポライトネス効果の観点からは、プラス効果を生むか、ニュートラル効果になる。また、話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも、「許容できるずれ幅 ( $\alpha$ )」を超えて少ない場合、それは、行動の適切性の観点からは、「過少行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果 (失礼、不快) を生む。逆に、話し手の見積もりが、聞き手の見積もりよりも、許容できるずれ幅 ( $\alpha$ ) を超えて多い場合、それは、行動の適切性の観点からは、「過剰行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果 (慇懃無礼、失礼、不快) を生むことになる。これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」は、DP 理論で解釈すると、話し手が、「聞き手が期待する、当該の状況における『見積もりに応じた言語表現』よりも、『許容できるずれ幅  $\alpha$ 』を超えて、『丁寧すぎる表現』を用いた場合 (過剰行動)」であるということになる。

このように、DP 理論では、「談話の基本状態が何であるかという見積もり」、「特定の言語行動に対するフェイス侵害度の見積もり」、及び、「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジーの見積もり」の話し手と聞き手の「差 (ずれ)」から実際の「ポライトネス効果」が生まれるという「相対的観点」を、より具体化して理論の体系に組み込んだ。これは新しいポライトネスの捉え方であり、DP 理論において初めて取り入れられた点である。

**2.7 「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」**

最後に、「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」についてまとめる。言語形式について言うなら、「行く」より「いらっしゃる」のほうが丁寧度が高いとか、その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、より丁寧であるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っていると言える。しかし、現実には、いつも常体で話す相手 (スピーチレベルの「基本状態」が常体) に「敬語」を使うと、かえって皮肉やいやみになるというように、たとえ、敬語を使っている、「マイナス効果」を生むこともある。つまり、常体が無標スピーチレベルである談話において「有標行動」となる敬体を使用することは、言語形式自体は、「敬体」であるにもかかわらず、相手に失礼だと感じさせたり、不愉快にさせたりするというような「マイナス効果」を生み得る。一方、仲間意識を高めるために用いる「ため口 (友達同士の言葉遣い)」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス効果として機能することも多い。

つまり、実質的に「ポライトネスの効果」を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」なのである。そして、その「ポライトネス効果」は、特定の場面においてどのような

言語行動が適切であると考えているかという「基本状態の認識」、「当該の言語行動や談話行動のフェイス侵害度」、及び、「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」の3つのうちのどれか、或いは、すべてにおける話し手と聞き手の「見積もり差（ずれ）」から生まれるということが分かる。これが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。

DP 理論は、対人コミュニケーションにおけるポライトネスをより広い観点から捉えて体系化しようとするものであり、円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、「失礼」「無礼」「慇懃無礼」といった行動も、マイナス・ポライトネス(インポライトネス)として、同一の枠組みで捉えるものである。

### 3 事例の分析と解釈

最後に、東（2017 予定）、高木（2017 予定）であげられた事例の中からいくつかを取り上げ、DP 理論の概念を用いて解釈する。具体的な事例を解釈する際、最も関係する DP 理論における概念は、ポライトネス・ストラテジーがそれに基づいて選択されるという「フェイス侵害度の見積り」( $W(x)=D+P+R(x)$  に基づく)である。先述のように、「見積り (estimation)」には、以下の3種がある。①「談話の基本状態」が何であるかについての見積り、②「ある有標行動のフェイス侵害度」の見積り、③「フェイス侵害度に応じて選択するポライトネス・ストラテジー」についての見積り。

異文化間コミュニケーション場面の特定の事例において、何が問題となるかは、まずは、対象となる事象（状況や言語・非言語行動の解釈や、或いは、学習者の言語・非言語行動）が、上記①～③のどの段階におけるものであるかを判断することである。異文化間ミス・コミュニケーションと認識される場合は、①～③のどれか、或いは、すべてにおいて、日本人と日本語学習者の「見積り」に「ギャップ（見積り差）」が生じている場合である。さらに、そのギャップ（見積り差）は、ポライトネス（快・不快）の観点から、聞き手にとって「許容ずれ幅（ $\alpha$ ）」を超えているかどうかによって、聞き手が問題ないと受け止めるか、「インポライト」だと受け止めるかに分かれる。

この基本を押さえた上で、いくつかの事例を考えてみる。東（2017 予定）は、日本の現代ドラマ・映画の抜粋シーンに対する日本人とフランス人学生のコメンツを分析し、日仏の学生の「事象の認識」に違いが生じる場合があることを明らかにした。以下、具体例に沿って見ていく。

<事例 1>引越しの挨拶場面において、ポライトネス要素として際立って注目されたのは、日仏両方とも「お辞儀の多さと深さ」と「笑い」であったという。日本人学生は、初対面にしてもお辞儀が多すぎると感じている場面を、フランス人学生は、「丁寧で礼儀正しい」、「敬意がある」、「優しそう」というように捉えていたという。

これは、DP 理論の概念で言うと、日本人学生の「基本状態」とフランス人学生の「基本状態」の「見積り」が異なっている場合（上記の①）と解釈できる。つまり、当該場面（引越しの挨拶場面）で期待されている言動のうち、お辞儀に関しては、日本人は、ドラマにおけるお辞儀はもう少し少ないのが「基本状態」、つまり、一般的であると捉えたのに対して、フランス人学生のほうは、お辞儀の多さは「日本人は礼儀正しい」というイメージに合致する行動（基本状態）として捉えたのである。その結果として、フランス人は、ポジティブな評価（プラス効果）が見られたのに対し、日本人学生のほうには、「過剰行動」と

して、「愛想笑」「お世辞」「ペコペコしすぎ」等のマイナス効果を生んだというように解釈できる。これは、「認識レベル」での違いであるが、これが「行動レベル」として、フランス人学生が、必要以上にお辞儀をするということに、つながらないとも限らない。

いずれにしても、このような事例は、先述の「①「談話の基本状態」が何であるかについての見積り」についてギャップがある場合であるので、日本語教育での対応としては、まずは、学習者の目的等に応じて必要な場面の「日本人の基本状態」がどのようなものであるかを授業等で提示することが重要だと言えるだろう。ただし、「日本人の基本状態」の提示というものが、一種のステレオタイプの押し付けにならないよう、同じような場面を複数提示し、日本人の中にもバリエーションがあることも、併せて指導することが極めて重要である。東(2017 予定)も、積極的にマルチモーダルな素材を利用することによって、学習者の「観察力」をつけることが重要であると指摘している。宇佐美(2015)で提案する「自然会話を素材とする WEB 教材」などを活用することが考えられる。

<事例 2>として、高木(2017 予定)の表題ともなっている場面について考えてみる。それは、ホームステイ先で夕飯後に、学生が教科書で覚えたばかりの表現で「お手伝いしましょうか」と申し出たところ、お母さんが「いいえ、大丈夫」と言ったため、それ以後、手伝いは必要ないと思い、あまり手伝わなかったという事例である。その後、書類のコメント欄に「何もしない子」と書かれていてショックを受けたという事例である。

これは、DP 理論で考えると、学生の「申し出行動」自体は場面に適しているものであったが、それに対する相手(ホームステイ先のお母さん)の反応(「いいえ、大丈夫」)の解釈とその後の行動が、「日本人の基本状態」から逸脱していたと解釈できる場面である。

先に記した DP 理論における「見積り」のタイプ①「談話の基本状態」が何であるか(何か手伝いが必要そうだという認識)についての理解はできているので、「申し出」はできたと解釈できる。また、②の「ある有標行動のフェイス侵害度の見積り」というのは、特に日本語においては、敬語を使う必要があるか否かというような「見積り」であるから、「手伝おうか」ではなく、「お手伝いしましょうか」という「敬体」が選択できているという意味では、②の見積りも適切である。③の「フェイス侵害度に応じて選択するポライトネス・ストラテジーについての見積り」が、②と異なる点は、②で、フェイス侵害度の見積りが適切にできて、敬体使用が必要だと判断できたとしても、③では、選択肢としてのポライトネス・ストラテジーには、「お手伝いしましょうか」だけでなく、「お手伝いします」、「お手伝いさせてください」等々の表現があるわけだから、その中で、「お手伝いしましょうか」を選択したということが、適切であったのかどうか問題となる。

これは、日本人でも個人差があると思われるが、このケースの場合は、ホームステイ先のお母さんが、「何もしない子」という評価をしていたという結果から考えて、③の選択するポライトネス・ストラテジーの「見積り」が適切ではなかったと解釈できるだろう。高木(2017 予定)も「お手伝いします」や「お皿、洗いますね」などを選択したほうがよかったというふうに述べている。DP 理論で言うと、「ポライトネス効果」に影響する3つの「見積り」のうち、2つまでできているのに、最後の、「フェイス侵害度に応じて選択するポライトネス・ストラテジー」の適切な選択ができなかったというように解釈できる。そうであるならば、①、②ができていることを評価した上で、③の段階の豊富な選択肢を提示し、その違いなどを詳しく説明するなどの対応が考えられるだろう。

このように、異文化間ミス・コミュニケーションが生じてしまう背景には、上記の①～③の見積りのどれかが適切にできていないということが原因となっていると解釈できる。

上記のような事例、或いは、日々の日本語のクラスで出くわす事例を、教師自身が、上記のように DP 理論の枠組みで分析することによって、特定の事例について、そこでは、どの段階の何が問題であったのかが、よりわかりやすくなると言える。

本稿の事例1のように、①、つまり、「基本状態」の認識自体が日本人と異なっていることが判明した場合は、適切な「基本状態」である場面を豊富に提示して、何がその場に適しているか（基本状態は何か）を学習者自身が独自に学習できるようにしむけることが重要になる。また、事例2のように、③、つまり、選択する表現のみが問題であった場合は、状況の認識自体は適切にできているということを理解した上で、表現自体に絞って、具体的で多様な表現（ポライトネス・ストラテジー）を数多く提示し、その場により適した表現を指導するというような対応ができるだろう。

#### 4 終わりに

以上、いくつかの事例を DP 理論の概念を用いて分析した。まとめると、ある異文化接触場面において、自文化の文化的習慣や価値観の影響を受けて、学習言語における対応が適切にできていないと思われる場合や、逆に、学習言語のいわゆるステレオタイプのイメージに影響を受けて過剰般化しているのではないかと思われる場合も、それを教師側の経験による考えだけに基づいて対応するのではなく、例えば、DP 理論の枠を使って教師自身がより分析的に考えてみることによって、より論理的に事例の分析をすることができ、その分析に基づいたより適切で具体的な対応ができるのではないかということである。

教師といっても、人間であるので、様々なステレオタイプや「思い込み」に、全く影響されないとは言いきれない。それ自体は、決して恥じることではない。むしろ、それだからこそ、なんらかの方法を用いることによって、よりの確に指導できる方法を考える努力をすることが必要なのである。その一つの手段が、DP 理論の枠組みで、異文化間ミス・コミュニケーション場面の原因を明らかにしてから対応を考えるという方法である。この考え方を適用することによって、異文化間ミス・コミュニケーションの事前防止もある程度可能になるだろう。

今後も DP 理論が日本語教育の実践に少しでも生かせるよう、より具体的な応用方法を提示していければと考えている。DP 理論の枠組みによる比較対照研究にも期待したい。

#### <参考文献>

- Brown, P and Levinson, S (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Usami, M (2011) Discourse Politeness Theory and second language acquisition, In Wai Meng Chan, Kwee Nyet Chin and Titima Suthiwan. (eds.) *Foreign Language Teaching in Asia and Beyond: Current Perspective and Future Direction*. De Gruyter Mouton: 45-70. (Reprinted from Usami, M. (2006) Discourse politeness theory and second language acquisition. In Wai Meng Chan, Kwee Nyet Chin and Titima Suthiwan. (eds.) *Foreign language teaching in Asia and beyond: Current perspectives and future directions*. Centre for Language Studies, Faculty of Arts and Social Sciences, National University of Singapore: 45-70.)
- 宇佐美まゆみ (2001) 「ポライトネスの談話理論構想」, 国立国語研究所 (編) 『談話のポライトネス』 pp.9-58. 凡人社.
- 宇佐美まゆみ (2003) 「異文化接触とポライトネス— ディスコース・ポライトネス理論の



- 観点から-」, 『国語学』第54巻3号, pp.177-132.
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習 -ディスコース・ポライトネス理論の観点から-」  
西原玲子・西郡仁朗編, 『講座社会言語科学』第4巻教育・学習, pp.150-181, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ (2008) 「ポライトネス理論研究のフロンティア: ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論(〈特集〉敬語研究のフロンティア)」, 『社会言語科学』11(1), pp.4-22, 社会言語科学会.
- 宇佐美まゆみ (2009) 『「伝達意図の達成度」『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロフィシエンシー」 鎌田修・山内博之・堤良一編『プロフィシエンシーと日本語教育』 pp.33-67, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ (2015) 「自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材を使った「対話」と「会話」の教育」, 『2015 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』 pp.231-236.
- 高木三知子 (2017 予定) 「「お手伝いしましょうか」がインポライトネスに変わるとき」, 『2016 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』.
- 東伴子 (2017 予定) 「フランス人学習者は、日本人のインポライト場面をどう認識するか -異文化理解へ向けての考察-」, 『2016 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』.